

エミール

平成29年1月13日
(通巻第32号)

発行：三重県児童相談センター
電話059-231-5902

三重県の児童相談所における“真実告知&ライフストーリーワーク” の取り組み (その13)

北勢児童相談所 山本智佳央 (児童心理司)

平成21年度から25年度にかけて、『エミール』で“真実告知&ライフストーリーワーク”の連載を担当していた山本です。通巻第19号から第30号までの合計12回にわたって、社会的養護の子どもたちへの真実告知やライフストーリーワークの必要性・重要性をご紹介してきました。

連載内容が一区切りしたことと、筆者の転勤もあって平成26・27年度の2年間は休載していましたが、今年度、筆者が児童相談所に復帰しましたので、再び『エミール』で真実告知とライフストーリーワークに関する紹介記事を担当することになりました。どうぞよろしくお願いたします。

『エミール』は三重県児童相談センターの公式ホームページに掲載されているので、この連載はインターネットで閲覧することができます。そのせいか、時々、全く知らない他県の児童相談所の方から「『エミール』見えています」とか「『エミール』を読んでお電話しました」といったお声かけやお問い合わせをいただくことがあります。連載を始めた平成21年頃は「こんな連載、読む人がいるのだろうか…？」と心配していたくらいですから、その頃と比べると、社会的養護の子どもたちに対して、その子の“人生の歴史”を丁寧に扱い、対応していく支援方法が全国的に広まっているようです。そして、こうした支援を行うにあたり、インターネットの検索機能を使って参考になる情報を集めて、支援方法を考えている方々も少なくないということが分かってきました。三重県の児童相談所からの小さな小さな情報発信でも、お役に立っていることがあるのだと思うと、うれしい反面、責任も感じる今日この頃です。

そこで今回の『エミール』では、筆者が知っている範囲での情報になりますが、真実告知やライフストーリーワークといった支援方法を取り巻く最近の状況についてご紹介したいと思います。

真実告知やライフストーリーワークを行なっている地域が広がっている

まず確実に言えることは、社会的養護の子どもたちへの真実告知やライフストーリーワークといった実践を行なっている地域は、今や日本全国に広がっているということです。筆者が知る限りでは、北海道から九州・沖縄地区まで、全国各地の児童相談所や児童養護施設等の入所系児童福祉施設（以下、施設）・里親家庭で取り組まれているようです。

もう少し正確に言うと、元々、日本全国で実践されている取り組みなのだと思うのですが、各地からこうした実践に関する情報発信の機会が増えてきたため、「ウチの県でもやっています」という新たな発信や、「自分たちがやっていた実践には『ライフストーリーワーク』という名前があったのか!」という気づきが生まれているようです。

ただし、具体的な実践内容については、それぞれの地域ごとに特色や濃淡があります。子どもとの定期的・継続的な関わりを通じて“その子の人生の歴史”を振り返ることを目指している地域もあれば、関わる大人の側が「どうやってやればいいたろうか?」と試行錯誤している地域もあり、それぞれの地域事情があるようです。

地域単位での勉強会・研修会活動が活発になっている

真実告知やライフストーリーワークといった支援手法は、子どもにとって辛い過去の情報を取り扱うことが多いため、子どもが動揺したり不安定になることがあります。そのため、児童相談所と施設・里親がしっかり連携し、役割分担しながら進めていくことが必要です。

そこで、地域の関係機関が集まり、真実告知やライフストーリーワークの考え方・具体的な支援方法等について、共に学ぼうとする地域が増えてきています。関係機関が合同で参加する研修会や、定期的な勉強会活動がその例です。回数や内容は地域によって異なりますが、社会的養護の子どもに関わるさまざまな職種・立場の人たちが、同じ話を聞く・同じ支援手法を学ぶことの意義はとて大きいようです。

一方で、さまざまな立場の人たちが一堂に会して同じ話を聞くことで、子どもの養育形態の違い、具体的には施設・養育里親・養子縁組家庭といった違いによって、実施方法や留意点の違いがあることも明確になるようです。養子縁組した子どものライフストーリーワークに児童相談所がガッチリ関わることは全国的に見てもまだまだ少ないでしょうし、施設で暮らす子どもに対して施設や児童相談所が「あなたのことは一生責任を持って育てていく」というメッセージを送ることは出来ません。子どもが暮らしている状況に応じて、細かいアレンジが不可欠ですが、“その子の人生の歴史”を肯定的に扱うという基本的な考え方に違いはないので、やはり地域の関係機関が共通理解を深めておくことは重要だと考えます。

「ライフストーリーワーク」の裾野は広い

三重県では、施設で暮らす子どもたちに入所理由や離れて暮らす家族の状況、幼い頃のその子の様子などを伝え返していく取り組みを「真実告知とライフストーリーワーク」とか「生い立ちの整理（振り返り）」と呼ぶことが多いのですが、同じ「ライフストーリーワーク」という呼び名を使っている取り組み内容が、地域によって微妙に違っていることが分かってきまし

た。また、呼び名や内容は違うけれども“その子の人生の歴史を丁寧に扱う”という考え方に基づくさまざまな取り組みが、全国各地で行なわれていることも分かってきました。

もしも、こうした取り組みを、近年関心が高まっている「ライフストーリーワーク」という呼び名で括ったとすると、その内容は実に多様で、しかし少しずつ重なりを持った取り組みとして整理できそうです。この状況を「ライフストーリーワークの裾野は広い」と表現してくれた人がいて、筆者も実に分かりやすい表現だと思い、よく使っています。

呼び方や内容は違っていても、「この子も、(短いなりに)かけがえのない人生を歩んできたひとりの人間であり、生みの親は間違いなくこの子の命の起源である」という視点で子どもの将来に向けた支援を考え、組み立てていくことは、あらゆる社会的養護のカタチに共通することだと筆者は考えます。真実告知やライフストーリーワークの考え方は、子どもに関わるすべての関係者をこの原点に立ち返らせてくれるものではないでしょうか？

第1回・東海地区ライフストーリーワーク実践報告会が開催されました

平成28年10月8日(土)名古屋市で東海地区のライフストーリーワークに関する実践を報告し合うイベントが開催されました。

当日は、地元の愛知県や名古屋市の社会的養護関係者をはじめ、静岡県・岐阜県・三重県から約50名が参加していました。また東海地区以外からの参加も数名あり、実践の広がりが全国に渡っている様子がうかがえました。

実践報告の内容は、地域での勉強会活動・施設での実践報告・職場における人材育成の取り組みと多岐にわたり、ライフストーリーワーク実践をさまざまな角度から考える良い機会になりました。

これからも東海地区のつながりを通して、互いの地域の良い実践を参考にしたり取り入れたりしながら、社会的養護の子どもたちへの真実告知やライフストーリーワークの取り組みをますます充実させていきたいと思います。(北勢児童相談所 山本智佳央)

今日までを振り返って

中勢児童相談所 一時保護課 鈴木 悠太

保育士職で採用され、平成27年8月から中勢児童相談所一時保護課配属となりました。それまで児童養護施設に6年半、保育園・幼稚園に3年半勤めていました。

私が保育士になりたいと思ったのは中学1年生の時、友だちの2歳の妹を遊んであげた時、懐いてもらえたことがきっかけでした。その後中学・高校時代に保育園での職場体験やボランティアに行き、中1の時の夢が変わることなく保育士になりました。

保育士は今でも、「子どもと遊ぶだけやろ」、「楽そうやね」と言われることが多いので、そ

のイメージを変えて、「保育」の重要性をより多くの人に理解してもらえるようにしたいと思っています。一時保護所には中途採用ということで、まずは職員との良好な関係が築けるようにと努力しました。一時保護所は児童を直接指導する仕事なので、何よりも職員間の良好な関係・意思疎通が大事だと思い目標にしました。戸惑うことも多くなかなか思うようにはいきませんが優しく接していただけたので、児童の指導に対しても一緒に悩み、相談することで少しずつですが職員間の関係ができてきたと思います。

日々悩むことばかりですが、自分にできることを一生懸命取り組み、自分の特長を生かしていくことが毎日の目標です。

勉強の毎日、悩む毎日で心身ともに大変ですが、向上心を持ち充実した日々を過ごしていると思います。これからも大変な日が続くと思いますが、今に満足せずこれからも努力を続けていきたいと思っています。

今日までを振り返って

北勢児童相談所 家庭児童支援三課 伊藤 拓世

平成27年4月に北勢児童相談所のケースワーカーとして勤務するようになってから、様々なことを経験させてもらいました。前任者から引き継いで担当する相談がある上に新しい相談が入ってくるため、目まぐるしく1年が過ぎたように感じました。そうかと思えば、一人ひとりの子どもの成長や家庭の変化を振り返ると、この1年で多くのことを共に体験させてもらったために時間の経過がゆっくりにも感じ、不思議な気分になります。

入庁日に私はケースワーカーとして働くことと聞き、福祉の仕事であることは分かっていましたが、具体的に何をすればよいのか、福祉について制度も法律もほとんど知識のない自分ができることなのか、わからないことだらけでした。そんな状態でしたが、周りの先輩方に少しずつ教えてもらって、どうにかやっていけるかなと思っていました。

相談を継続している中には、子どもたちが幼少のころから関わり続けている家庭もあり、各家庭の歴史の長さとその重さを感じることも多々あります。子どもそれぞれに性格、特徴、持っている病気、障がい、関わる人や機関が異なり、家庭環境や保護者の性格、経済状況も千差万別です。そのために当然、どういう対応を取るのか、どの機関がどのように関わっていくのが一番子どものためになるのか違ってきます。それがわかっているようでわかっていなかったために、「わかったかもしれない」と思っても、次の瞬間にはこれまでの対応が通用しなかったり、新たな課題が出現したりして「やっぱりわからない」と落ち込むことの繰り返しでした。

今でも何をすればよいのか、何となくわかってきたようで、やっぱりわからないことだらけ、どのように対応してよいのか戸惑っていることだらけのために周りの方々に迷惑をかけ、たく

さんのお力をいただいています。入庁当初よりは子どもや保護者、周りの方に安心を与えること、役に立てることが増えていけば良いと思います。これからもそうした部分が多くなるよう、精進していきます。

今日までを振り返って

児童相談センター 家庭児童支援室 技師 今村 菜帆子

平成27年4月に入庁し、児童相談センターに言語聴覚士(以下 ST)として配属されて2年が経とうとしています。1年目は先輩の業務を見学させてもらうことから始まりましたが、2年目からは個別相談、集団療育などメインとして携わる業務も増えました。まだまだ分からないこと、悩むこともたくさんありますが、先輩方に支えていただきながら日々取り組んでいます。

入庁する前は ST として医療機関に勤務していました。そこでは、聴覚に障がいのある子どもの聴力検査や言語検査等、評価を行うことがほとんどでした。そんな中、就学を控えた子どもの保護者から「聴覚障がいのことを学校にどのように伝え、支援をお願いしていけば良いのか」と相談を受けました。このことがきっかけとなり、聴覚に障がいのある子どもたちがよりよい生活を送ることができるように、評価後の支援にも携わりたいと強く思うようになりました。そのため、児童相談センターに配属され、聴覚に障がいのある子どもの総合的な支援に携わることができると知った時は、胸がいっぱいになりました。

児童相談センターに配属された1年目は、福祉機関で求められる ST の役割に驚かされる日々でした。同じ職種であっても、機関が異なれば求められる役割が異なるのは当然だと思いますが、これまで経験したことのない業務も多く、想像を上回るものでした。そのため、「どう対応して良いのか」「こういった対応で良かったのだろうか」と悩み、落ち込むこともありました。そういった中で、様々な保護者と接し、多くの保護者が子どもの将来について不安を抱いているということに気が付きました。支援をしていく中で、不安を全て解消することは難しいかもしれませんが、軽減することはできるのではないかと思います。そのためにはどうしたら良いのだろうと考えるようになりました。そして「まずは自分自身の考えを変えていかなければならない」という答えに行き着きました。これまでは、上手いかなかったことばかりに目を向けていましたが、「上手いかなかったことも、今後、上手いくために必要だったこと」と前向きに捉え、どうすれば次に活かすことができるのかを考えるよう心がけました。これまでの考え方から新しい考え方に変えて行くことは簡単ではありませんが、物事の捉え方を変えることで、助言する内容や方法の範囲も広がり、的確な支援を行うことに繋がるのではないかと思います。

児童相談センターに配属され2年が経とうとしています。これまでに学んだことを忘れず、聴覚に障がいのある子どもとその保護者の支援に取り組んでいきたいと思っています。

今日までを振り返って

北勢児童相談所 一時保護課 玉置 遥菜

平成27年4月に北勢児童相談所に配属になり、1年9か月ほど経ちました。この間、わからないことばかりで戸惑うことも多かったですが、多くの方に支えていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

将来について考えたとき、いつの日か人と関わる仕事がしたい、子どもが好きだから子どもと関わる仕事ができるといいなと思うようになりました。大学で心理学を勉強するなかで児童相談所のことを知り、目指すようになりました。4月1日に初めて一時保護所の存在について知り、どんな仕事をするのか、どんな役割なのか最初はわからず、きちんと理解できるまで大変でした。

一年目は、やるべきことをやるのに必死で毎日があっという間に過ぎていきました。社会人も一年目ということもあり、わからないことだらけで周りの方々にたくさん助けていただきました。子どもと関わることも、距離が近すぎたり遠すぎたりして、うまく指導することができず、これでいいのかと悩みました。二年目は、知識を増やそう、積極的に行動しようという目標を立てましたが、なかなかうまくいきません。去年に比べて保護される子どもの人数が多く、難しい問題を抱える子どもも多いので、関わり方が難しくなっています。一年目に比べると、少し余裕が出てきて臨機応変に対応できるようになってきたと思いますが、まだまだ勉強の毎日です。

私が働いている一時保護所では、さまざまな子どもが入所します。今まで子どもと関わった機会が少なかったので、最初はどのように対応したらいいのかわからず、子どもと関係を築くのも難しかったです。保護所の性質上、子どもの入れ替わりが激しいので時間をかけて関わっていくことができません。その中で行動観察をしていくのは大変ですが、退所後少しでも子どもたちのためになるように、日々努力しています。また、保護所にいる間に経験やできるようになったことを増やしてほしいと思うので、私にできることを考えながら過ごしています。

一時保護所では子どもと朝から夜まで一緒に過ごします。楽しい時間を一緒に過ごすからこそ、注意したり叱ったりするのはとても難しいです。思いがうまく伝わらないことも多く、指導の難しさを日々感じています。しかし、困っているときにその都度アドバイスをいただいたり、ベテランの先輩方が職場にたくさんみえるので助けられています。今後は、教えていただいたことを吸収し、自分なりの子どもの支援をしていけたらいいなと思っています。